

教育加入型低密都市



現在多くの地方都市では、中心市街地活性化のため、居住人口の増加を図る街なか居住が促進されており、商店街では高層マンションの建設が増加しているが、高密度な再開発は「商店街における小売業の特性（＝商店街というのは、商品を通して人々を滞留させ、回遊させる。人々はそこで同時に時間を消費するものであり、そのことによって新たな出会いの機会を提供する。）」を減衰させコミュニティを希薄化させる恐れがある。今回は鳥取県米子市中心市街地の商店街を対象敷地にし、最初の一歩として学校を商店街に分散させることでコミュニティ・多様性を生み出し、かつての商店街の『歩いて楽しいまち』の復活を提案する。

1 背景

少子高齢化・車の大衆化により鳥取県米子市の中心市街地にある商店街は空家・空地が著しく増加
解決策の一つとして高層マンションの建設が進むがコミュニティは希薄化



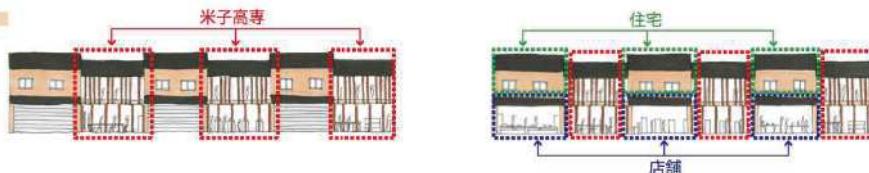
提案

『教育』に着目し、郊外に位置していて閉鎖的であり老朽化が進む米子工業高等専門学校（米子高専）を商店街に分散

→ 商店街（長屋）の間口の狭さの特徴を生きかし多様性を生み出すことで時代を継承するとともに、人々を滞留・回遊させコミュニケーションを生み出す。一場の価値が上がり店舗が増えしていく
人々はかつての商店街での『歩いて楽しいまち』を再認識し、住みたくなるまちに変わっていく

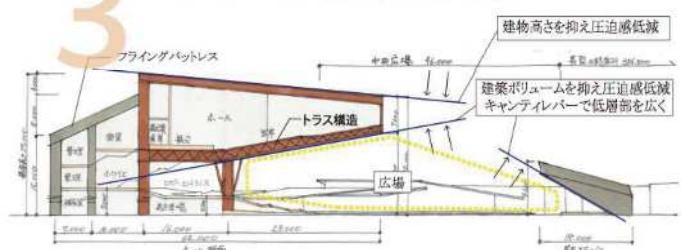
→ 高密度開発によるコミュニティの希薄化に対し、低密度な教育加入型都市開発によって、多様性、徒歩スケールの都市を作り出し、まちの魅力を高める
さらに人口減少社会における周辺都市間の人取り合戦を抑え、周辺都市との調和を図る広域な計画も期待できる

2

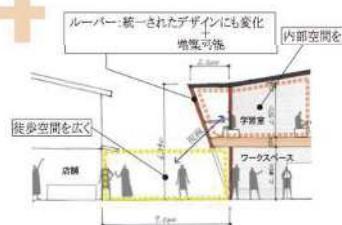


3

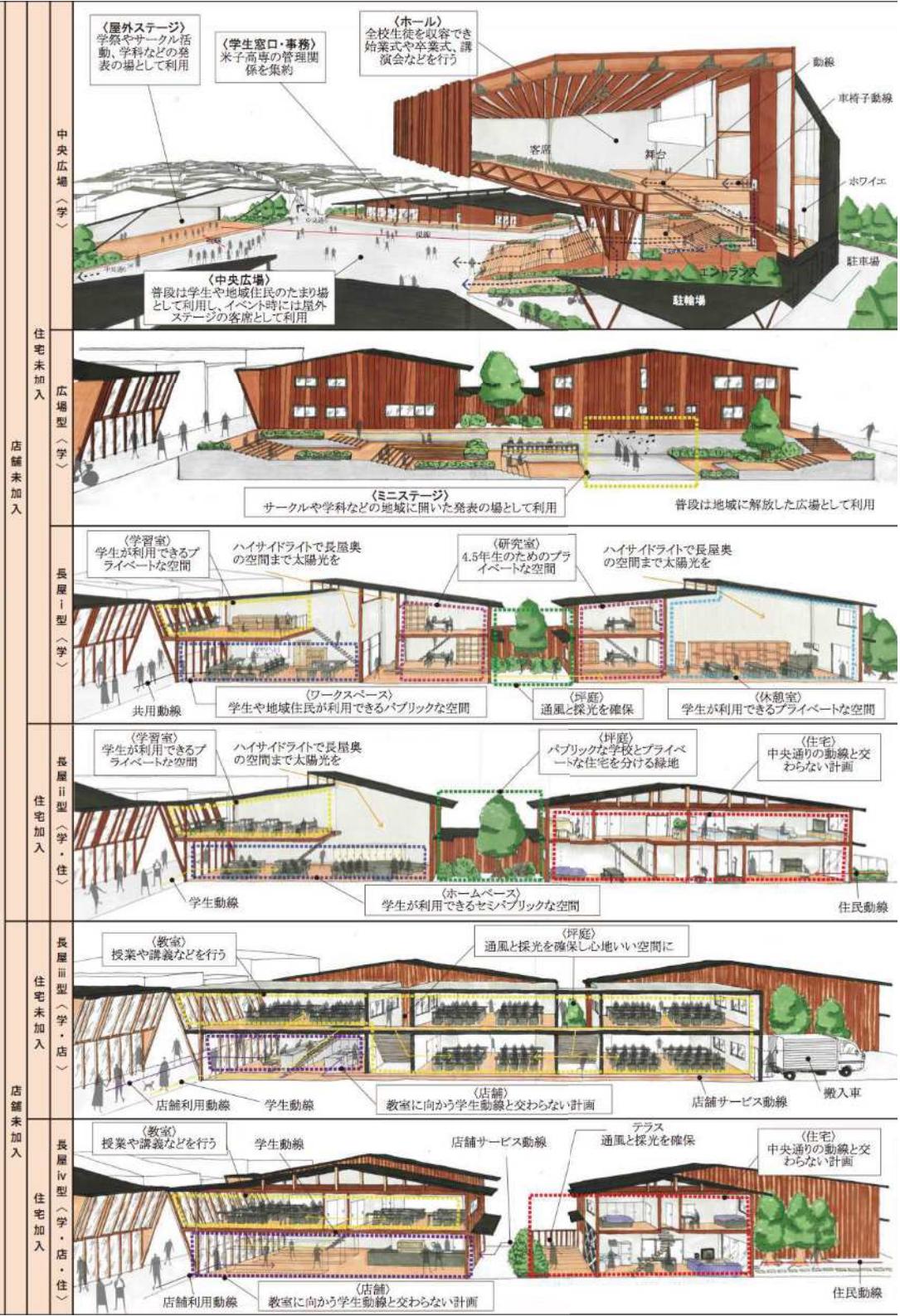
中央広場・ホール外観デザイン(断面)



4 長屋ファサードデザイン

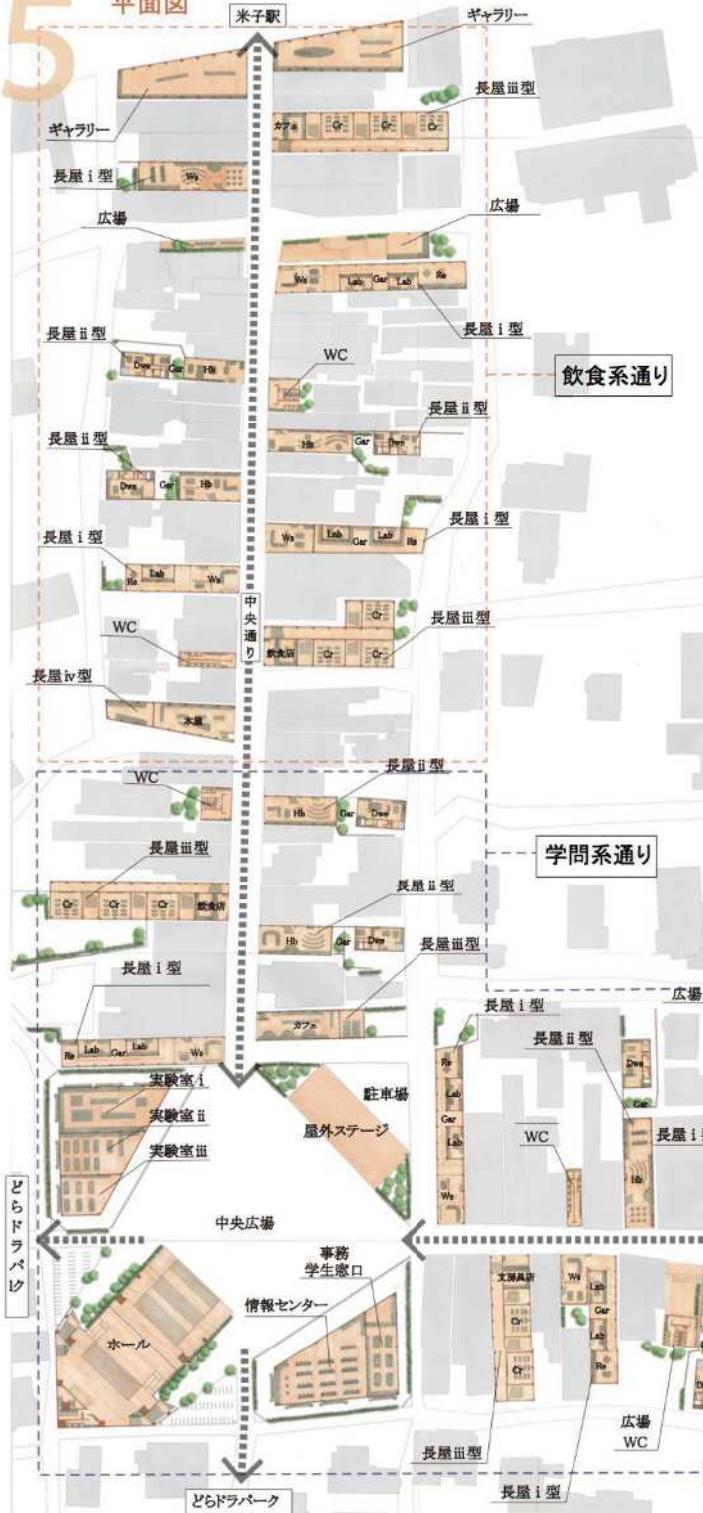


建築空間の分類



5

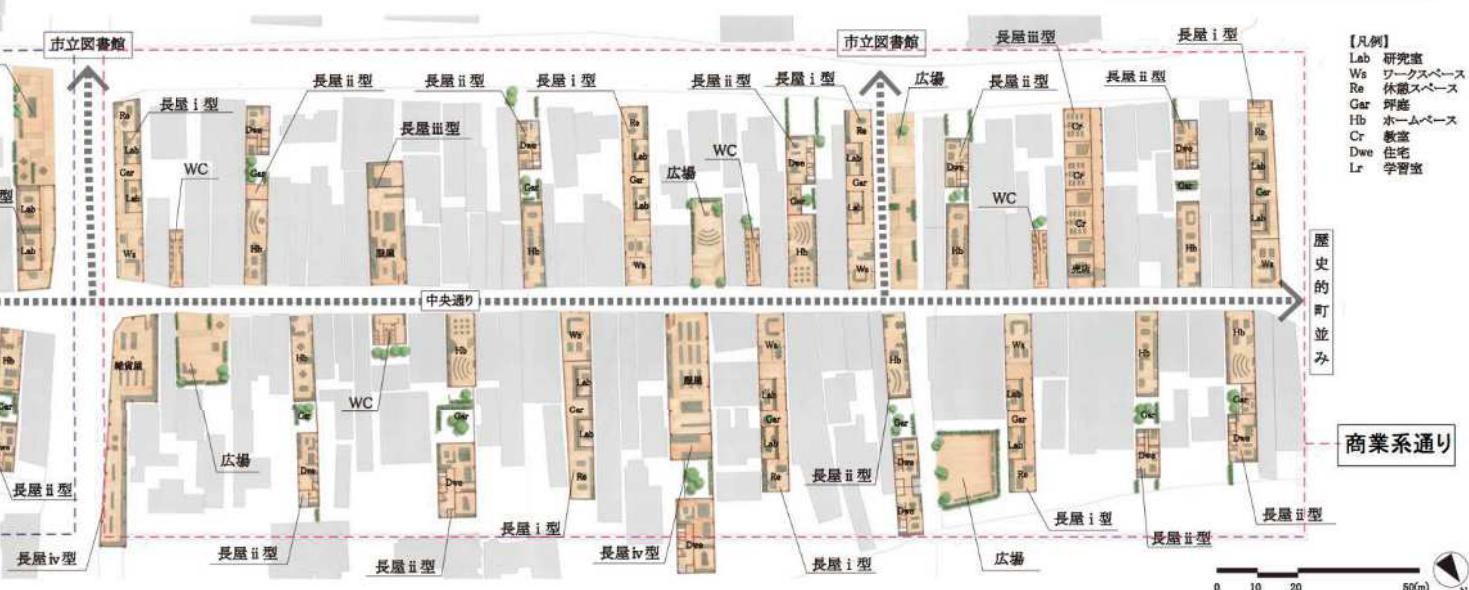
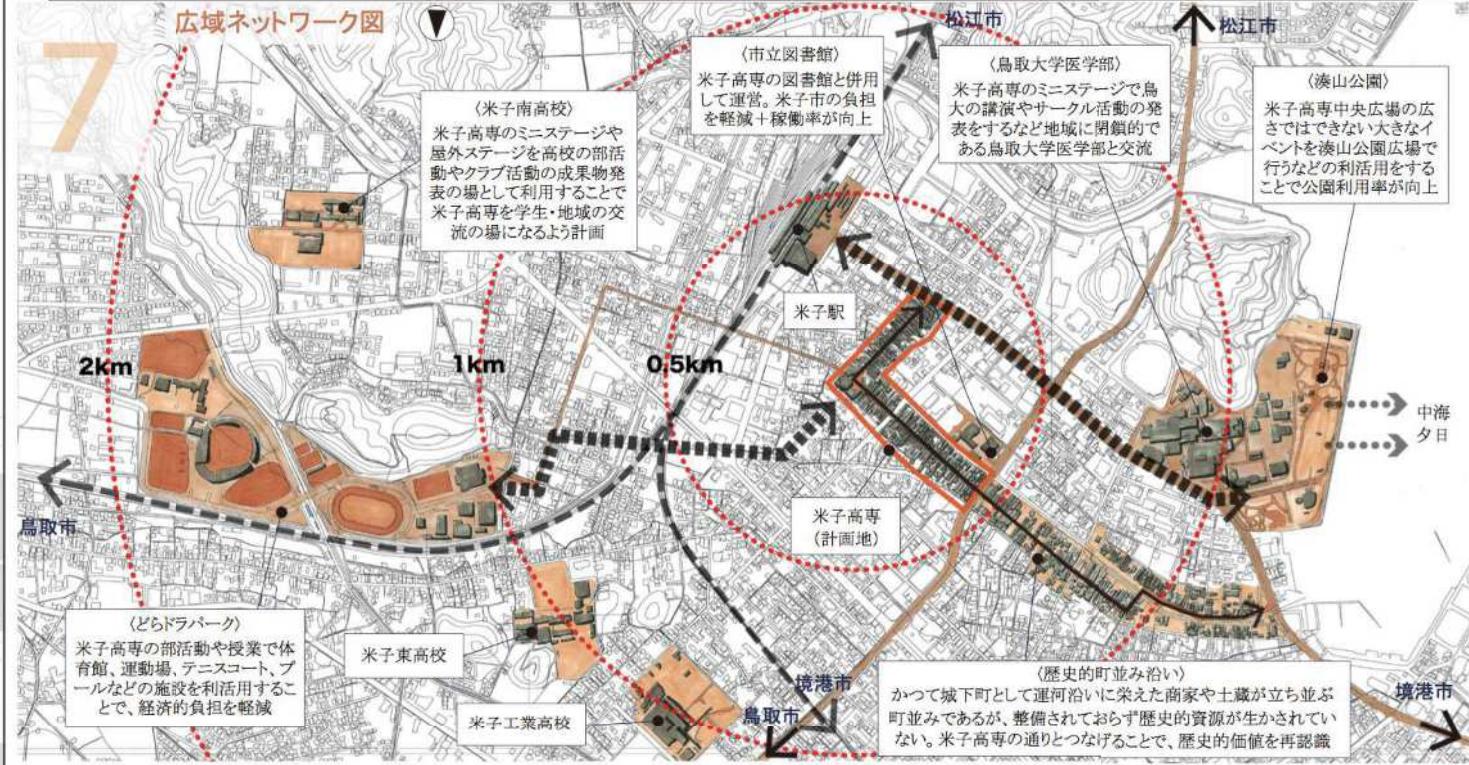
平面図



様々な物語



広域ネットワーク図



【例】
 Lab 研究室
 Ws ワークスペース
 Re 休憩スペース
 Gar 検査室
 Hb ホームベース
 Cr 教室
 Dwe 住宅
 Lr 学習室

商業系通り

0 10 20 500m N

1

研究旅行のテーマ 人間の街を体感する

私は、人間の街（著者：ヤングール）に魅了され、今回の設計を通して「日本版人間の街」を提案しました。現在の日本では、高度成長期のスプロールなどを背景にコンパクトシティ構想を謳っていますが、青森や岡山をはじめとして政策は順調ではないと感じています。都市を集約化しインフラ効率の向上や高齢者問題・環境問題を解決するという都市計画理論は理解できますが、市民の思想を十分読み込んでいないのが課題ではないでしょうか。立地適正化計画等で駅周辺に大型商業施設や病院福祉関連施設を設けても、車が大衆化した現代では、市民にとって地価の高い都心部よりも郊外の方が住みやすいということが現実だと思います。

そこで本設計では、大型商業施設や病院福祉施設以外の付加価値として、ヤングールの「人間の街」を参考に、かつて賑わっていた商店街を対象とし「教育」を用いて「歩いて楽しい街」の復活を提示しました。昔の“商店街らしさ”的魅力を人々に再認識してもらうことを目標に、『人間スケール』『持続可能性』『自立性』『健康』『安全』『生き生きした』を意識し設計に取り組みました。しかし「人間の街」を十分理解し設計に反映できたとは思っていないません。本を読み込むだけでは「これで本当に歩いて楽しい街になるのか」と感じていたため、実際に「人間の街」として取り上げられている都市に身を置き、体感してみたいと思いこのコンペに応募しました。



『人間の街』
著者：ヤングール（Jan Gehl）
訳者：北原 理雄（きたはら としお）
コペンハーゲンやバース、マルボルン、ヴェネチアなどの都市を通して、人間的スケールの「生き生きした」、安全で、持続可能で、健康的な街を取り戻すための、実践に裏づけられた公共空間デザイン論が述べられている。

2

訪問予定の都市 デンマーク コペンハーゲン

著書「人間の街」で紹介されている都市の中でも、デンマークの首都コペンハーゲンを研究旅行の対象都市とします。現地では以下の要素を体感したいです。

1. 自転車の街を体感する

コペンハーゲンは、長年にわたって自転車交通を推奨してきました。立派な自転車路網が整備され、安心で効率的な代替交通システムを支えています。2008年には、自転車利用が通勤・通学の37%を占めるまでに増加しています。本設計でも商店街学校と関係する各施設を自転車ネットワークで構成しました（7 広域ネットワーク図）。



2. ストロイエ（歩行者専用街路）を体感する

コペンハーゲンは公共街路が多いが、その発端はストロイエです。ストロイエを出発点として、都市アクティビティが大きく変化し、より多くの人々が街を歩き、滞留するようになり、新しい都市活動パターンが生まれました。本書では、公共空間でアクティビティを生ませるために、アクトビティが潜在的に自己増殖するプロセスが重要と記されています。本設計でも自己増殖を意識し公共空間を計画しました（中央広場のデザイン）。



3. 時速5kmのスケールを体感する

コペンハーゲンは徒歩速度である5kmのスケールで設計されており、そのスケールでの建築は豊かな知覚印象に基づいています。空間は小さく、建物どうしが寄り添っており、ディテール、人々の表情や動きが一体となって濃密な知覚体験を生み出しています。一方車の街では、時速50km以上で設計されており、信号や標識は、運転者が情報を取り込むことができるよう単純で巨大化しており、多様性が失われている都市空間になっています。



4. 最適密度な街を体感する

生き生きした街には、高い建築密度や密度住宅と職場の大きな集積は関係なく、必要なのは魅力的な都市空間とそれを利用したいと考える一定数以上の人口です。また建築物の高さと人間のコミュニケーションが深く関係しており、街路と高い建物との結びつきは、5階以上になると実質的に失われることが分かっています。実際にコペンハーゲンは中高層以下の建築物で構成されています。本設計でも低層部の賑わいを意識し低密度な提案にしました。



5. 都市における柔らかいエッジを体感する

建物低層部をどう処理するかによって都市空間のアクトビティが大きく左右されます。例えば、透明性（展示してあるものや建物の中で起こっていることが分かるとまち歩きが促進される）や質感・ディテール（良質な素材や豊かなディテールで楽しめる）、混合機能（狭い間口と多くの戸口に多彩な機能が加わると内外の交流が増加する）、垂直方向のファサードリズム（一回のファサードがリズムを持っていると、歩くだけで楽しくなる）などの柔らかい要素がエッジに含まれていることでアクトビティを促進させる効果があります。本設計でも長屋のファサードにルーバーをリズミカルにもうけて柔らかいエッジとなるように計画しました。



6. 住宅における柔らかいエッジ（シベリウスパーク）を体感する

コペンハーゲンの住宅団地シベリウスパークには柔らかいエッジがあり、団地内を私的、半私的、半公的、公的の4段階の領域で区別している。この団地は同種の開発事例に比べて犯罪が少なく、屋外空間周辺における活動が活発に行われています。



7. 郷愁のない現代都市での再生を体感する

上記の他にも、街のアクトビティを発生させるために様々な工夫がされています。コペンハーゲンはいつたん失った都市空間を取り戻すことにつき成功しましたが、ヴェネチアのノスタルジックな風景都市空間とは異なり、堅実な経済、多くの人口、多様な都市機能を持つ現代都市です。文化や歴史に頼らない工学的なアプローチをした都市空間を調査したいと思います。



8. 近代・現代建築を体感する

コペンハーゲンにはシュミット・ハマー & ラッセンのデンマーク王立図書館やヘニング・ラーセンの新オペラハウスなどのおもしろい近代・現代建築が点在しています。街との関係性も含め体感してみたいと思いました。



3

体感・調査方法 自転車とスケッチブックとカメラ

前述しましたが、コペンハーゲンは自転車路網が十分整備されている街です。したがって現地での移動は自転車を軸にして移動する予定です。そして、興味深いものがあれば足を止め、スケッチと写真で記録に残します。同じ目的物でも、直感的に感じたことや詳細な情報、その場の雰囲気などをスケッチで残し、客観的でリアルな情報をカメラを用いて写真で残します。

